大覚寺本「小夜衣」補遺

大槻修
「小夜衣の会」

序

平成九年一月、大槻修・「小夜衣」の会共著として、「大覚寺本『小夜衣』本文と註釈」(上)を刊行した。引き続いて、同(中)を平成九年度中に刊行すべく、その準備を整えてきたところ、刊行助成費など、思わぬ事態が起こって、当面、その作業の中断やむなきに至った。ただ、同(中)の公刊は延期の事態となっても、完成原稿の作製は完了すべく、また、この際、同(上)のミスプリ・錯誤・補入、さらに諸先覚より賜ったご指摘を加え、加えて大覚寺本上・中の系図・梗概・年立などをまとめて、ここに「大覚寺本『小夜衣』補遺」を掲載して、一応の責めを補うことにしたい。なお各項のあとに、大槻修・田淵福子・河野千穂それぞれ担当者の名を付して( )にとどめた。

一　大覚寺本『小夜衣』(上・中)梗概

《上巻》　当帝の兄であられる冷泉院の御子、兵部卿の宮は、時の中宮を姉に持ち、容貌・性格・学才すべてにおいて優れており、父院・母大宮がその身を案じるほどであった。宮は、ある五月雨の日、侍女である宰相の君から、按察使の大納言の娘、山里の姫君の美しさを聞き、手引きを依頼する。山里の姫君の後見である尼上は気が進まないが、足繁く通う宮に、姫君は徐々にうちとけていく。

山里の姫君は、按察使の大納言と尼上の娘との姫君で、尼上の娘は、姫君が五歳ころすでに死去していた。按察使の大納言は、北の方との間に、もう一人姫君をもうけており、その姫君を入内準備のため大切にお世話している。それに比べ、山里の

姫君に対しては、姫君を厭う北の方に気兼ねして、思うようなお世話もできず、尼上にお預けしているのであった。

さて、宮は、夜歩きを案ずる父院のため、山里への米訪がかなわなくなってきた。ちょうどその頃、三条院の御弟である関白の姫君で、弘徽殿を姉に持つ中の君との縁談がもちあがり、なかば強制的に結婚させられる。宮の結婚を、宰相の君から聞いた山里の姫君は嘆き悲しみ、宮もその嘆きを思って煩悶するが、山里への来訪は以前にも増して難しい。宮は関白の姫君を訪れる気にもなれず、関白側も、宮の途絶えがちな来訪を不審に思うが、大切にもてなす。関白の姫君も、このような宮の様子を辛く思う。

久しぶりに山里を訪れた按察使の大納言を、姫君の身を案じる尼上が説得し、大納言は北の方に山里の姫君のことをきりだす。ちょうど入内する姫君の世話役が欲しかった北の方も、山里の姫君を引き取ることに乗り気であったため、山里の姫君を迎え取ることとなる。山里の姫君は、宮のことを思うと父の許へ移る決心がつきかねるが、久しぶりに訪れた宮に何もうち明けられず、これが最後の逢瀬か…と耐えがたく思うのであった。

《中巻》　父大納言邸に迎えられた山里の姫君をみて、北の方はその美しさに驚き、姫君の母代にふさわしいと喜ぶ。山里の姫君を人目につかない所に移そうと考えていた兵部卿の宮は、姫君が大納言邸に行ったことを知って嘆き悲しむ。その後、宮は、ますます関白邸を訪れなくなり、院に籠もりがちになる。一方、北の方の姫君の女御参りが盛大に行われる。女御は梅壺と称し、その母代の山里の姫君は対の君と呼ばれる。

帝の愛情は、梅壺よりも対の君へ増してゆき、それに気付いた対の君はむしろ辛く思う。宮も、中宮との会話で、対の君が山里の姫君である確信をもち、梅壺への御寵愛の噂を聞いても、その寵愛の相手は対の君ではないかと心配する。

五節の夜、宮の姿を見た対の君は、我が身の悲しさに涙し、帝のあからさまになってきた求愛にも辛さが増し、局にひき籠もりがちになる。対の君の局を帝が訪れるのを見た女房達が、そのことを梅壺と北の方に報告し、対の君を憎らしく思った北の方は、民部の少輔夫婦に命じて、対の君を謀って連れ出させ監視させる。対の君の行方不明を知った尼上、宮らは嘆き悲しむが、対の君の消息は全くつかめない。対の君がいなくなったため、帝の梅壺に対する寵愛はますます薄れるが、そのことで、より一層、対の君に対する北の方の憎しみは増すばかりであった。

（この項、大槻・河野）

二　大覚寺本『小夜衣』（上・中）年立

《上巻―上上・上下》

年月	事項	備考	丁数
第一年の五月	・兵部卿の宮、宰相の君から按察使の大納言の山里の姫君のことを聞き、手引きを依頼する。	（上の上） ・兵部卿の宮 18歳ぐらい（ヒーロー） ・山里の姫君（ヒロイン）	一オ 三オ
	・兵部卿の宮は、当帝の兄である冷泉院の御子で、時の中宮は姉にあたる。容貌・性格・学才すべてに優れているため、父院・母大宮は息子の身を案じる。	冷泉院―兵部卿の宮 帝 中宮	六オ 九ウ
	・宰相の君、兵部卿の宮と姫君との縁談を、尼上に打診する。		
	・嗟嗟に病身の乳母を訪ねた帰途、兵部卿の宮は、山里の姫君の住処を発見し、後見の尼上に、姫君への想いを訴えるも、尼君は気が進まず。		
	・帰る早々、兵部卿の宮は姫君のもとに文を送るが、姫君の代わりに宰相の君が返事。		
	・宰相の君、重ねて尼上に、兵部卿の宮と姫君との件を勧める。		
	・兵部卿の宮、再び乳母を見舞う途中、山里の姫君の所で雨宿りをする。その夜、姫君のもとに忍び入る。	兵部卿の宮 ＝ 山里の姫君	一五オ 一九オ 二〇ウ
	・夜も明けぬうちに、兵部卿の宮から姫君に後朝の文。しかし、相変わらず姫君の代わりに宰相の君が返事。		二五ウ
	・兵部卿の宮、日暮れも待ち遠しく姫君を訪ねる。ますます姫君にひかれた宮は、山里に通いつめ、姫君も徐々にうちとける。	尼上―○ ＝―山里の姫君 按察使大納言	二六オ
	・院は、兵部卿の宮の夜歩きを心配。よって、山里への来訪も、宮は意のままにならず。		二八ウ
	・山里の姫君は、実は按察使の大納言と尼上の娘との間の姫君。尼上の娘は、姫君が五歳		二九ウ

ごろに死去。尼上は、左衛門の督に盗み出される前、三条院の御代の中将の命婦であった。

・山里の姫君を厭う北の方に気兼ねして、父大納言は、姫君を屋敷に迎えられず、尼上に預けている。一方、北の方は、わが腹の姫君を入内させようと考え、大切に育てている。

・三条院の御弟の関白、冷泉院と縁続きのこともあり、二人の姫君のうち妹君と宮の縁談を院にもちかける。院・大宮、嫌がる宮を説得するもかなわず、よって仕方なく、勝手に結婚の準備を進める。

・尼上の出自　三〇ウ

・継子・継母の確執　三一オ

・関白の姫君との縁談

六月

・兵部卿の宮は、出家遁世にも踏みきれず、嘆くばかり。

・山里でも、宮の途絶えがちな態度を不審に思う。

・宮と関白の姫君との婚礼の儀式が盛大に行われる。関白の姫君は、今が盛りの花と美しく、宮も全く愛情がないというわけではないが、山里の姫君への想いは断ち切れず。急いで帰る宮を、関白側は不審に思う。

・宮、関白の姫君への後朝の文を書くべきところ、山里の姫君へ文を書く。山里の姫君からの返事に、宮の悲しみが一層増すが、母大宮の催促により、しぶしぶ関白の姫君にも後朝の文。あまりに美しい宮の筆跡に、尻込みする姫君の代わりに、母上が返事。

・宰相の君、山里の姫君に、宮と関白の姫君との結婚を話す。宰相の君からそのことを聞いた宮は、山里の姫君の胸中を思い、煩悶する。

・気乗りせず関白邸を訪れる宮を、関白はむしろ大切にもてなす。関白の姫君は、誇り高く、万事につけて立派な様子。

（上の下）

兵部卿の宮＝関白の姫君　一ウ　二オ　五オ

七オ

・宰相の君、山里の姫君に宮の結婚を告げる　一〇ウ　一二オ

初秋

・一方、宮の途絶えに、山里の姫君は思い嘆く。宮も、山里の姫君のことを思い、関白邸への米訪も途絶えがちとなる。
・宮、ついに我慢できず忍んで山里を訪れる。久しぶりの逢瀬に、宮・姫君、涙に暮れる。
・院・大宮、思い沈む宮の様子を見て、関白の姫君と結婚させたことを悔み、むしろ宮の思う通りにさせるべきだったと、胸を痛める。
・関白の姫君、このような宮の様子に思い乱れる。新婦は、宮より二歳ほど年長。
・関白、宮の疎遠を辛く思うが、米訪の際には大切にもてなす。
・大納言、久しぶりに山里に立ち寄り、以前と違い整えられた庭の様子に驚く。尼上の説得により、大納言、北の方に山里の姫君のことをきりだす。入内する姫君の世話役が欲しかった北の方、引き取ることを提案する。
・山里の姫君、宮のことを思うと、父の許へ移る決心つかず。
・宮、久しぶりに山里を訪れ、姫君の箏の琴の音の素晴らしさに聞き入る。姫君、父の許へ行くとしたら、これが最後の逢瀬かと、心の中で耐え難く思う。

・宮・山里の姫君、久しぶりの逢瀬　一三ウ
・院・大宮の後悔　一九オ
・関白の姫君、夫より二歳年長　二四オ
・父大納言久しぶり山里へ。尼上の説得　二四ウ
・山里の姫君、父の許にゆく気せず　二六ウ
　二九オ
　三四オ
　三六オ

《中巻―中上・中下》

・兵部卿の宮と山里の姫君、涙ながらの後朝の別れ。
・宮、山里の姫君を人目につかない所に移そうと考える。
・大納言、山里の姫君を迎える。姫君と尼上、別れの嘆き。姫君の御供には、少納言の乳母・娘の小弁・右近・童などが参上。
・山里の姫君を迎えた北の方、その美しさに驚き、わが腹の姫君の母代にしても見苦しくないと喜ぶ。

（中の上）

・山里の姫君、父大納言邸へ　一オ
　三ウ
　四ウ
　七オ

・山里の姫君、祖母君と宮のことを思い、悲しむ。
・北の方は、夫の大納言に、山里の姫君をわが腹の姫君の母代として、宮仕えさせるよう提言する。大納言しぶしぶ承諾し、山里の姫君側もそれに従う。
・宮、山里の姫君を移す場所を支度して、手紙を送るが、姫君が大納言邸へ移されたことを知り、驚き悲しむ。
・涙に暮れる宮、関白邸を訪れてはみるものの、姫君のうちとけない様子に、ますます山里の姫君を恋しく思い、院に籠もりがちになる。
・宮、尼上に手紙を送り、山里の姫君から返事をもらえるよう依頼する。宮の手紙を見た姫君、悲しみに暮れるが、いまさら文を交わし合える状況ではないと、返事を書かず。
・大納言、山里の姫君に琴を勧め、その音色の素晴らしさに感動する。北の方も母代にふさわしいと喜ぶ。
・北の方の姫君の女御参り。山里の姫君はその母代。豪華な支度で、女房なども三十人ほど整える。
・帝、女御を申し分なくご覧になり、また母代の姫君のことも気にかかる。
・山里の姫君は、対の君と呼ばれる。女御に対する帝の手紙への返事は対の君がし、帝もその筆跡の素晴らしさに心ひかれる。
・帝が、対の君の素性に興味を持って頻繁に訪れるのを、両親は女御へのご寵愛と誤解して喜ぶ。
・帝、ますます対の君への愛情が増す。対の君は、こうした帝の様子を心苦しく思う。
・宮は、梅壺の女御へのご寵愛の噂を聞くにつけても、むしろ対の君に帝が心動かされて

・北の方の悪計（一）　七ウ　八オ
・兵部卿の宮、山里の姫君の転居を知る　一〇ウ　一一ウ
・北の方腹の姫君入内　一四オ　一四ウ　一六オ
・山里の姫君→対の君　一七ウ　一九オ
・対の君に関心もつ帝　二〇オ　二二オ　二三オ

いるのではないかと心配になる。
・宮、中宮との会話で、梅壺の女御の母代が山里の姫君である確信を持つ。
・悲しみに暮れる宮は、尼君を訪ねて、胸中の苦しみを訴える。

十一月（五節）

・帝、対の君への募る想いを筆すさみにするが、対の君、見ない振りをする。
・五節の夜、対の君、兵部卿の宮の姿を見て涙を流す。宮も対の君が自分を見ているだろうと思い、物思いに沈む。
・同夜、管弦の遊び。宮、対の君の琴の音色を思い出し、なかなか退出できず。
・対の君は悲しみに暮れ、気分が悪いと、帝のもとへ参上せず。
・帝、昼時分に対の君の局へ渡るが、見舞いに来ていた女御の乳母子の小弁の手前、すぐ帰る。
・女御のもとに参上した小弁、側の女房達に、帝と対の君との仲が疑わしいことを報告。女房達が口々に言い合うのを、女御も聞き、対の君のことを油断ならぬと思う。
・帝、対の君を想う心の慰めに、管弦の遊び。対の君は箏の琴、帝は笛。女御には琵琶を勧めるが、手も触れないので、中納言の内侍が弾く。対の君の素晴らしさに、帝、たまらず対の君の手をとらえる。
・帝と対の君との噂が、誇張されて広まる。対の君もこの噂に気付き、父大納言と北の方がどう思われるかと心乱れる。
・局にひき籠もりがちになった対の君を訪ねた帝、机の上の文を見付けて追及するが、人の気配に立ち去る。
・対の君の局に入る帝を見た女房達、女御と北の方に報告。北の方は、対の君を憎らしく

・女御の母代が対の君とは…と宮　二五ウ　二八オ

（中の下）

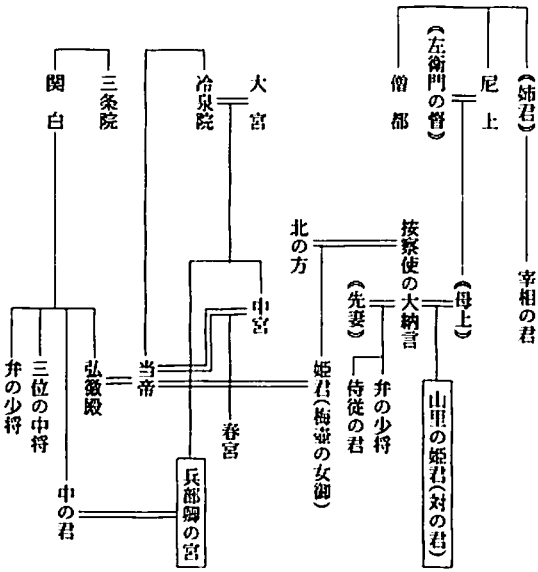
・五節の夜、宮を望見　二ウ　四ウ
・帝、対の君の局へ　六ウ　八オ　九ウ
・小弁、女御側に告げ口　九ウ
・帝の関心深い。　一一ウ
・二ウ
・重ねて帝の局参り　一五ウ　一六ウ

	思う。 ・北の方、乳母子である民部の少輔という者を夫婦一緒に呼び寄せ、対の君を預かり、見張るよう頼む。 ・民部の少輔、山里の尼上が病気だと偽って、夜更けに対の君を連れ出す。小侍従・右近だけが同伴。 ・北の方の策略と気付いた対の君ら、嘆き悲しむ。 ・尼上の見舞いに行った乳母の報によって、対の君の行方不明が明らかになる。大納言、嘆き悲しむ。ただ、北の方は、「対の君に思いを寄せる者が略奪したのでは」と、辛そうなフリをする。	・北の方の悪計(二) ・民部の少輔夫婦 ・対の君の失踪	一八オ 一八ウ 二〇ウ 二二ウ
第二年の春	・乳母は、尼上のもとへ参上して、北の方の陰謀ではと推測するが、尼上は宮の謀りごとの可能性も考える。話を聞いた宰相の君が尋ねるが、宮も心当たりなく、嘆き悲しみ、山里を訪問する。 ・対の君は尼上のもとへ、と思っている帝、対の君恋しさに涙す。 ・悲しみに沈むばかりで、水さえも飲まない対の君を、民部の少輔の妻は気の毒に思う。 ・乳母、くまなく対の君を尋ね探すが、手掛かりなし。 ・大納言、尼上の悲しみを思い、対の君を迎え寄せたことを後悔する。 ・北の方、対の君がいないため帝の訪れが少なくなったことで、一層のこと対の君を不愉快に思う。 ・帝、対の君の長い不在を不審に思い、兵部卿の宮が関係しているのでは…と、中宮のもとへ行き、宮のことを聞き出す。	・嘆く宮、山里を訪ねる ・父大納言の後悔	二五オ 三三オ 三四ウ 三六オ 三七オ 三七ウ 三八ウ

・中宮から帝の様子を聞いた宮、帝を訪れる。帝、宮への疑いを晴らすが、対の君のいない寂しさに沈み、ますます梅壺への寵愛は薄れる。 ・祖母君（尼上）と父大納言のことを思うにつけても、辛そうな対の君の様子。民部の少輔の妻は、対の君に同情して、北の方を恐ろしい人と思う。	・帝、宮への疑惑を解く	四二ウ 四五ウ

（この項、大槻・田淵・河野）

三　大覚寺本『小夜衣』（上・中）系図



（注）① この系図は物語の上巻・中巻に登場する主な人物を示した。

② ｜は血縁関係、‖は婚姻関係を示す。

③ 関白と冷泉院とは、本文に「離れぬ御仲」とあり、関白の兄三条院と冷泉院との仲は不詳。

④ （　）は、物語開始時に、既に死亡している人物を示す。

⑤ □に囲んだのは、この物語の男女主人公である。

（この項、田淵・河野）

四　大覚寺『小夜衣』（上）正誤

頁・行		誤	正
四・9	凡例	成田百穂	成田百恵
四・10	凡例	（以下　二〇名）	（以上　二〇名）
五二・1	本文	さていやましの	さてはやまじの
五二	脚注②	さていやましの－底本「さてもやましの」。集成・文庫により改める。校註「さてはやまじの」。	さてはやまじの－底本「さてもやましの」。集成・文庫「さていやましの」。校註により改める。
五四	補注三	窓のうちに－楊貴妃のために捨てられ、閉じ込められた女の話など、「上陽白髪人」の故事がある。白氏文集出典。	削除
六二・1	本文	重なれるあはひもい、	重なれるあはひも、
六二・3	本文	あやめもげに	あやもけに
七一	脚注⑲	恨む－底本「うらむる」。集成により改める。	恨むる－集成「うらむ」。
七二・2	本文	恨む・	恨むる
八一・7	本文	姫君は……にや。「これは、……	「姫君は……にや。これは、……
九〇・4	本文	心細いからむ	心細からむ

一二二・9	本文	数珠の行く末をだに	数珠の行方をだに
一二二	脚注⑪	行く末ー底本「ゆくゑ」。諸本により改める。	行方ー諸本「行く末」。
一三五・5	本文	雲の気色	空の気色（この項、辛島正雄氏のご指摘）
一三五	脚注⑪	雲ー底本「空」。諸本により改める。	空ー諸本「雲」。
一三六・3	本文	雲の気色	空の気色（この項も辛島氏のご指摘）
一三六	脚注㉔	雲ー底本「空」。諸本により改める。	空ー諸本「雲」。
一三六・4	本文	わりなき	わりなき
一六七・上・12	訳文	師の君	帥の君
一六七・下・1	訳文	師の君が	帥の君が
一六八・上・7	訳文	十七、八歳	十八歳
一七〇・下・18	訳文	ご来配	ご采配
一七八・下・4	訳文	明け暮	明け暗（この項、田中喜美春氏のご指摘）
一八一・上・4	訳文	宰相の君は	宰相の君は、その姉に当たる人の娘だったが、母が亡くなった後は、
一八一・上・17	訳文	二条院	三条院
一九二・下・9	訳文	雲の様子	空の様子

なお、一七八頁下段の訳文を次のようにさしかえて戴きたい。実は、写真製版による作業上、各行最末尾の字（□で囲む）が切断された由、印刷所からの連絡があった。

つかないご様子なので、宮はたいそう気の毒で、なだめあぐねていらっしゃるうちに、夜が明けてしまったような気配がする。宮は残念で、昼までこんな状態でいるわけにもいかないので、行く末長い約束をして、まだ明け暗の中をお帰りになるが、すぐ引き返してしまいそうな気持ちになられる。宰相の君の思うところも恥ずかしいので、宮は何ともおっしゃらずお帰りになるが、道すがら、唐撫子が五月雨にしおれている夕映えの姿のような姫の様子、涙の露に濡れていたその面影が新鮮でいとおしく、『わがものにしなかったら、どれほど残念だったことか』と思われるにつけても、今となっては一晩の隔ても辛く感じるであろうに、山里へははるかな道のりとて、思う通りに毎晩通うことができなければ、姫の悩みもますます絶えることがなかろうと思うと、早くも宮の心は辛く、思わず嘆いてしまわれる。（蔵中）

まだ夜も明けぬうちに、御硯を召し寄せて、早くもお手紙を書かれる。

ゆっくりとお話しをする時間もないうちに、辛くも明けてしまった東雲の空ですよ

お手紙を心待ちにしておられた姫君方では、「いつの間に」

（この項、大槻・田淵・河野）

五　大覚寺本『小夜衣』（上）補注追加

頁・行	補　注
三九・1	いつの年とはいひながら―参考歌「かくばかり思ひ初めにし時ぞうきいつの年とはさだかならねど」（草根集）。この項、田中新一氏よりご指摘を戴いた。
五七・6	ほととぎすの初音も心つくさぬ―参考歌「たれしかも初音聞くらんほととぎす待たぬ山路に心つくさで」（拾遺愚草）

六三・8	卯の花咲ける垣根続きに―参考歌「いづれをかわきてとはまし我が宿の垣根続きに咲ける卯の花」(金葉集・夏・匡房)
六九・9	あはれ、一くだりの〜心を尽くさぬ人なきに―「一行も書き流し給ふ水茎の流れをば、珍しう措き難きものに…心を尽くす人々、高きも後れたるもさまざま、おのづからいかでかは無からむ」(狭衣物語・上)
九七・4	かしこまるさまにて言少なくて〜思し召せども―「かしこまりたるさまにて御答へも聞こえ給はねば、心ゆかぬなめりといとほしく思し召す」(源氏物語・紅葉賀) この項、河北騰氏よりご指摘を戴いた。
一〇二・1	思しやるもしるく、ほどなき軒端にながめけるほども思ひやられて―かの程なき軒端にながむらむ有様も、ふと思ひ出でられ給ふ。…おぼし遣りつるもしるく、(狭衣物語・上)
一二九・8	もの憂くのみ思さるれど〜めでたし―「宮は、いと心苦しく思しながら…待ちつけきこえ給へる所の有様も、いとをかしかりけり。」(源氏物語・宿木)。この項は、長谷川信好氏の指摘による。
一三〇・4	夜も更けにしかば、いとどほどなく明けぬるに―「秋の夜なれど、更けにしかばにや程もなく明けぬ」(源氏物語・宿木)。この項は、長谷川信好氏の指摘による。
一三〇・7	この山里は、ただやはらかに〜女房三十人ばかり、童四人―「唯やはらかに愛敬づきらうたき事ぞ、かの対の御方はまづ思し出でられける。物宣ふ答へなども、恥ぢらひ給へれど、又余り覚束なくはあらず、すべていと見所多く、かどかどしげなり。よき若人ども三十人ばかり、童六人」(源氏物語・宿木)。この項は長谷川信好

	氏の指摘による。
一三・1	おぼろけにも山里へはおはしまさず〜いと心尽くしにて過ぐすにも—「え容易くも紛れ給はず。御文は明くる日ごとに、数多かへり奉らせ給ふ。疎かにはあらぬにやと思ひながら、覚束なき日数のつもるをいと心づくしに見じと思ひしものを、」(源氏物語・総角)。この項は長谷川信好氏の指摘による。
一三・4	永らふには〜見るべきわざこそ—「実に、ながらへば心の外にかくあるまじき事も見るべきわざにこそはと」(源氏物語・総角)。この項は長谷川信好氏の指摘による。
一三・9	数珠の行方をだに知らざりけむ人—「数珠の行く方も知らずなりにけり」(源氏物語・明石)。この項は、河北騰・辛島正雄両氏よりご指摘を戴いた。

一三・5	永らへばなど思ふに〜夜更くるほどに見出だし給へれば—「自らながらへばなど、慰めむことを思ふに、更に姨捨山の月のみ澄みのぼりて、夜更るままによろづ思ひ乱れたまふ」(源氏物語・総角)。この項は長谷川信好氏の指摘による。
一三・8	一色なる四方の木末をかしく〜目のみ留まりて心細きにも—「一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ宿はよろづの事につけて静かに心細う」(源氏物語・柏木)
一三・2	いひつづけ給へるにも、岩根の松の末も傾きぬべく—「言ひ続け給へるは、げに、岩根の松の末も傾きぬべし」(狭衣物語・大系本巻三)。なお、この本文は全書本には見えない。
一八・7	かの山里の垣根つづきに見えつる—参考歌「いづれをかわきてとはまし山里の垣根続きに咲ける卯の花」(金葉集・夏・匡房)

一元・1	朝には栄花を開けども夕には無常の風に―参考「朝に栄花を開くもの、夕には無常の風に痛ましむ」（鵤鷺合戦物語）
四一・2	おはします時もとみにさし出で給はず―「大殿におはしけるに、例の女君とみにも対面し給はず」（源氏物語・若紫）。この項、河北騰氏よりご指摘を戴いた。
四五・1	さらぬだに秋のあはれは〜心細さもせむかたなし―「思ふ事なき人だに物あはれなりぬべきに…身にしみて心細く聞ゆれば」（狭衣物語・上）

なお、以上各項のうち、特に明記してあるもの以外は、田淵福子の指摘による。

（平成九年一〇月二九日出稿）